

## 平田悦朗先生退官記念講演録

平田です。今日の、この退官記念講演は、身のほど知らずなことなので、ずいぶん辞退いたしました。しかし、とうとうお引き受けすることになって、では30分ぐらいのご挨拶程度ならと申し上げたんですが、今日のプログラムのとおり1時間ということになってしまいました。

私がお茶大に來まして、10年数ヵ月たちます。その前に、NHKに32年おりました。ほとんどの時期、アナウンサーとして仕事をしておりました。で、何を話そうかなといういろいろ考えてみたのですが、やはりNHK時代の日本語の話しことばについての苦勞話を聞いていただくことにしました。

NHKのころの、自分自身で一番大きい仕事だなと思えるのは、昭和47年、1972年の2月28日に中継をいたしました連合赤軍浅間山荘事件のことで、ここにいらっしゃる半分ぐらいの方は、お若いからご存じないでしょうけれども、これは当時きわめて衝撃的な事件でした。

その後、平成元年、1993年にNHKが世論調査をしました。これまで見たテレビの事件や番組のなかで、もっとも印象に残ったのは何でしたかという全国的な調査です。この世論調査の結果は、連合赤軍浅間山荘事件の中継が一番印象に残っているということでした。20年以上たってしまった1993年当時でも、日本人の見たテレビ番組のなかでは連合赤軍浅間山荘事件の中継がトップだったというんですから、やはり大変なインパクトがあったんだろうと思います。当日の夕方6時過ぎ、機動隊がその浅間山荘に突入して人質を救出したんですが、その前後の時間帯の視聴率調査があります。これはビデオリサーチ社の関東地区の調査ですけれども、そのデータでは89.7%です。視聴率1%というと百万人ぐらいが見ていると言われますから、やはり8千万人ぐらいかな、かなりの人が見ていたんだな、それだけインパクトがあったんだろうなと思います。

浅間山荘事件の話しだけしていても、仕方がありません。私の記憶の中ではもちろん浅間山荘事件はとても大きいんですが、それは昭和47年2月28日の一日だけのことです。しかし、その浅間山荘事件があった昭和47年の前後、私はNHKのアナウンサーの一人として悩み、苦しみ、いろいろなことがあった時代でした。これから、まずその狭い業界の内部の話を聞いていただくことにします。

NHKアナウンサーの悩み、それは何かということですね、浅間山荘事件の中継アナウンスの方法論とも重なるんですが、われわれアナウンサーへの批

判が強かったということです。NHKのアナウンサーは冷たいとか、個性がないとか、アナウンサーのNHK調というものが世の批判の対象になっていたわけです。これはNHKの外側からの批判もそうですし、NHKの内部からも、そういう批判が巻き起こっていました。

アナウンサーは没个性的である、ぐらいまではいいのですが、何だか空々しい、ウソっぽい。他人の書いた原稿を読んでいるだけじゃないか、取材した本人がしゃべれば、正しくわかり易く伝わるはずだ。アナウンサーでは駄目だ、記者が画面に出て伝えるべきだ、という主張です。

しかし、事はそれほど単純ではありません。不特定多数の人に、わかりやすく伝えるという伝達技術は、そう簡単に身につくものではないと、経験的にも考えていました。

一方でそう思いながらも、アナウンサーはもういらなくなるのじゃないだろうかというような不安を持ちました。もうアナウンサーというものは、職業として成立しなくなっていくんじゃないだろうか、というような危機感にさいなまれていた時代でもありました。それが昭和40年代から50年代前半ぐらいにかけてのことです。

そのころのことをお話しします。当時の私自身の課題は、アナウンサーの、というより、むしろ自分自身のNHK調の克服ということになります。

「調」というのはどういうものかと言うと、イントネーションというふうを考えてもらえばいいと思います。文のイントネーションです。まあ、抑揚と言ってもいいかも知れません。で、これについては、細かい研究がすすんでいません。同じ韻律でも、アクセントにくらべてイントネーションというのは音調が微妙で多様で分析しにくい対象です。

昭和26年に金田一春彦氏は「コトバの旋律」という論文で「せっそう」という言葉を使って、それを説明しています。「せっそう」の「せつ」はふし、音節の節、「そう」は演奏の奏。一種音楽的なトーンであると説明しています。金田一さんは、あの表現はまずかったと言って、後に、それを「わちょう」、話す調子というふうに訂正なさってます。

その節奏というのはどういうものをイメージしているかと言うと、これは後に早稲田大学の秋永一枝氏が、「講座日本語教育」の「日本語の発音—イントネーションなど—」で、それを詳しく敷衍しています。1966年です。で、秋永さんは、その何とか調をいくつかに分けました。

例えば、小学生朗読調というのがあって、「きょーは、おとーさんと、うみへ、」という、こういう調ですね。それから陶酔調。これは古文や詩などを朗読するときの、「山の一、あなたの一、空一遠く一」とこういうものです。それから活弁調。これはもう今は聞くことができませんが、昔、無声映画には弁士がついておりまして、「春や春、春、南方のローマンス」と歌い上げるわけですね。その弁舌のことを活弁、弁士のことも活弁といっていました。それからガイド調、これは分かりますね。様々なガイドさんがいます。エレベーターガールなどもこれに入ると思います。それからスポーツ放送調。これも講談にちょっと似たようなところがあります、つくえをたたいて、気持ちのいい調子が。それがスポーツ放送調。それから、奉読調。昔、校長先生が祝日に教育勅語などを読んだときの調子です。「朕惟フニ」と一種独特の調子で読みあげるんです。神官の祝詞奏上にています。それから暗記調。これはわれわれが小学生のころ、天皇の124代の全部を暗記させられました。神武天皇からはじまって「神武綏靖安寧懿徳孝昭孝安孝靈孝元開化崇神垂仁」。だから正親町は何代目かといわれると、はじめからだ一っとやらないと出てこないという、ばかばかしいことをやらされましたが、そういうのが奉読調。それから掛け算調とか。これは、「ににんがし、にさんがろく」という調子です。まだほかにもあると思いますが、とにかく調というのはこういうものです。で、世の中の人アナウンサーにNHK調がある、冷たい、空々しいところって批判したわけです。

で、これから本論にはいります。

昭和40年代の批判は例えばこういうものでした。

内村直也という劇作家がおります。内村直也氏が「芸能」という雑誌の1974年9月号、これは昭和49年です、この9月号に「標準語— NHKのアナウンサー—」というタイトルで、NHKアナウンサーのアナウンスを批判しました。それは後にこういう『日本語と話しことば』という本にまとめられました。内村氏の批判はこういうことでした。昭和30年にNHKが出版した「アナウンス読本」という本を読んで、このなかに、アナウンスは一對一の自然な話し調子でなければならぬと書いてあるが、大部分のアナウンサーは「個性をころせ」という古い伝統を受け継いでいる。それが単に原稿を読むときだけでなく、インタビューや司会の場合にも出てくる。NHKアナウンサーの冷たさはここからきているというのでした。

『アナウンス読本』は、現在は内容も一新しタイトルも変えて『アナウンスセミナー』という本になっています。これは昭和60年に私もその中に文を書き、私自身がそれを編集して出版されました。これが、現在のアナウンサーの技術論を総まとめにした本と考えていただいてもいいと思います。

内村氏はその昭和30年版を読んで、結局未だ自然な話し調子のアナウンスを作り出していないじゃないか、大部分のアナウンサーは、感情を殺してニュートラルな立場を守らんがために、個性を殺すという方法論から抜け出していない、それは読むだけではなくて、インタビューや司会や、もっと自由な話しであるべきところにまで、個性を殺したアナウンスが見られる。NHKのアナウンサーのしゃべりの冷たさはここから来ている。それは客観性を通り越して冷たい。その冷たさが一種の権威主義的な話の調子を作り出していると批判したんです。

ニュースは書きことばなんですね。書き言葉であるニュース原稿を音声化する、その仕方に問題がある。それが、日常のアナウンサー全体の日本語に影響を与える。その結果、生き生きとした話し方ができなくなっているというわけなんですね。

しかし、客観的に物事を伝えるというのがアナウンサーの仕事の中心ですから、冷たいとか権威主義的だとかという、一種の印象批評では困るわけです。

こういう批判を、当時、週刊誌などがさかんに書きたてました。それは、権威主義的だ官僚的だというNHKの放送全体に対する批判と重なっていましたが、NHKを、ある意味では代表するイメージというのはアナウンサーですから、アナウンサーがその批判の象徴的な役割を担わされたというところもありました。しかし、客観的に言って、われわれは、ある型にはまった非常に融通のきかない、生き生きとしない日本語でしゃべっていたことも事実でした。

こうした批判は、例えばこういう資料にも見られます。これは、昭和53年、1978年にNHK放送文化研究所が各界の有識者20人に、放送の言葉についてインタビュー形式で意見を求めて、それをまとめた報告書です。もちろん、放送のことばを代表するのはアナウンサーですから、自然、アナウンサーのことばをめぐる意見が多いわけです。

例えば、東京工業大学教授の芳賀 綏氏は、こういう事を言っています。

「いかにもオーソドックスな言葉の訓練を受けていて、言葉を乱さない。口調も態度も乱さない。乱れない表現をしている印象が強い。その辺に、物足りなさを一般の人は感じるんじゃないか」

芳賀氏はNHKアナウンサーの表現法に理解があって、このインタビューの後段では、しかしそれはニュースを客観的に伝えるという性格から仕様がなないんだということを言っているんだけど、一般の人はそういう風を感じていたんじゃないかと思います。

それから、映画評論家の佐藤忠男氏は、

「ニュースはスタンダードが決まっているはずだし、それを勝手に変更することはできないと思いますが、あらゆる番組が全部同じテンポであるというのは、人間の生理からすると不自然だと思う。NHKが取り澄ました印象を与えるとすれば、話の内容によって喋るリズムが違うはずなのに、全てが同じ放送的テンポであるということに一つの理由があるんじゃないか」

たしかに、日常会話は一対一であり、場によって様々に変化するわけです。そういう日常会話の音声言語の基本的な法則をアナウンサーは生かしていない、ということを批判しているんだと思います。

同じインタビューのなかで、今紹介した芳賀氏はニュースについて、これはニュースについてだけですが、「事実を伝達するという点から言うと、今のアナウンサーの語り口は理想に近いと思う。透明度の高いものであることを要すると思う」。透明度が高いというのは、たぶんニュートラルな、中立的な、客観的な伝え方でなければいけないということを言っているんだと思います。佐藤忠男氏も、「アナウンサーのニュースがなくなるという事態は、ちょっと考えられない。というのは、テレビというのは興奮して見るものじゃないので、あのアナウンサーの非個性的なスタイルというものも、テレビ的なんです。やたらとテレビに興奮させられちゃ困るわけです」と、こういうふうに言っています。

確かに、ニュースなどはそうだと思います。

しかし、そうでない意見もたくさんあるわけです。

ニュースを聞いていて、悲しいニュースの時にはもっと悲しい顔をしろとか泣けとか、面白い時にはもっと笑えとかね。具体的にそういうような表現が、マスコミの間からつぎつぎに出てきて、一体NHKのアナウンサーは何を考えているんだというように、批判の矛先はもっぱらアナウンサーに向け

られていました。原稿を書くのは記者なのですが、批判の矢はそこまで届かないんです。本来は、ニュース原稿の文体や語彙、ニュースの提示の仕方や演出というものと構造的に深く関わっているはずなんですけれども、当時は、そこまでまだ理解がすすんでいませんでした。今のようなワイドニュースは、全くありませんでしたから。で、事実、アナウンサーは批判の内容になっても仕方のないようなアナウンスをしていました。私自身も型にはまったやり方から何とか抜け出したいのに、自分のまずさはわかっていながら、ではどうしたらいいかわからない、生き生きとした自分らしい話し方や伝え方ができないものか、自分を縛っている方法論をどうやって克服し、乗り越えていっていいのかの方向が掴めませんでした。

そういう、もがき苦しんでいるときに、札幌で冬季オリンピックが開かれました。1972年、昭和47年の冬です。浅間山荘事件が起きたその2週間前です。

そこで問題になったこと、というより私自身が問題化したんですが、それは、札幌の冬季オリンピックのスポーツアナウンサーの中継のやり方でした。

札幌で70m級ジャンプというのがありましたが、そのジャンプは金銀銅3つとも日本人が独占するという大ニュースでした。金メダルを取ったのは笠原さんという人だだと思います。で、日本中が興奮したんですが、それが終わった2月22日、作家の五木寛之氏が朝日新聞の学芸欄にこういう文を載せました。この見出しはですね、「魅力そぐ感動の強制 絶叫調 民族意識あおる」。これは、中継放送を聞きながら感じる、ラジオやテレビのアナウンサーの表現が空々しい、しゃべりすぎている、それから、ナショナリズムや感動を押しつけすぎるということを批判したわけです。

その新聞記事の切り抜きから、抜粋でご紹介します。

「画面からでは知り得ないデータや事実だけを、控えめに付け加えてくれれば、それで十分なのである。世界の平和がどうしたの、国民の期待がどうしたのといった問題は、こっちがテレビを見ながら勝手に考えることだ。余計な床屋政談や心理描写はご免こうむりたい。絵だけで間が持てないと思うなら、もっと音を拾えばいいではないか。風や観客の嘆声や、雪のきしみや、その他諸々の音は現場にみちみちているはずだ。アップだとか移動撮影だとかいった技術は、そっくり音にも応用できる世界である」

これはこの通りなんですよね。

それでおつづけてこう書いています。

「スポーツアナの主観的発言や、個人的感慨を私は非難しているのではない。実はその逆なのである」。このことはとても大事です。「スポーツアナの主観的発言や、個人的感慨を私は非難しているのではない。実はその逆なのである。ラジオとテレビを通じて、ほとんどのアナウンサーが真の意味での私的な感想をまったく語らず、今の日本国が迎えつつある強国日本の民族意識をあおりたてるような言葉を次から次へと吐きつづけることが問題なのだ。簡単にいって、そういうアナウンスは、せっかくのスポーツの面白さを半減させてしまう」

このとおりですね。私自身も、札幌の中継を聞いていて、事実よりは情緒を誇張して伝えるアナウンスは、どうにかならないものかと思っていましたから、この記事に衝撃を受けました。

その当時私はアナウンス室のなかで、アナウンスの技術もふくめて、アナウンサーのNHK内での位置とか、組織としての将来をどうしなければいけないかなどということを考える立場にいたものですから、この五木寛之の、こうした批判などを踏まえて、それから一月ぐらい、連日、アナウンサーに集まってもらって討議をしました。

そしてその年の夏に開かれたのが、ミュンヘンのオリンピックです。

ミュンヘンのオリンピックは、アラブゲリラのテロ事件などが発生して大変な騒ぎになりましたが、当時ブランデー IOC 会長はそのまま続行を決意して、オリンピックとしては、無事に終わりました。中継放送も、札幌オリンピックの反省を踏まえて、成果をあげることができました。

それでもなお、オリンピックが終わった後、その中継アナウンスについて、辛口の批評もありました。

これは、朝日新聞1972年9月5日の『波』というコラムです。全文はこうなっています。

「日本勝ったのアピールは、金メダル連呼のアナウンスとともに、一考を要する。むしろ競技直前や直後の選手たちの、スポーツマンとしての表情をじかにとらえていくことが望ましい。そのほうがオリンピックムードを健康に盛り上げるだろう。表彰式のアナウンスも気になる。優勝した選手たちの内面にことさら入りこんで、実は、外側から、情緒を付与しようとする方式は、かえって表彰台の映像をしらけさせる」

その通りだと思います。

「表彰式のアナウンス、優勝した選手たちの内面にことさらに入りこんで、実は、外側から、情緒を付与しようとする方式は、かえって表彰台の映像をしらけさせる。『ころなしかがうるんで』とかよけいな形容句は、選手たちと私たちとの間を遮断するのだ」といって批判したんです。

表彰台に上がって、感激している選手をいろんなことばで形容します。なにか言わないと、放送に空白ができてしまう、そういう強迫観念もあるわけですけど。そうすると、「彼は今、感激に打ち震えています」、打ち震えているかどうかわかんないわけですよ。「日本にいる両親はさぞお喜びでしょう」、ほんとにそうなのかどうか。そりゃ、喜んでないとは言えないけど、自分で確かめた事実でもないのに、こうもあろうかという、ありきたりの通念で処理してしまう。推測や想像だけで、外側からべたべたべたべた情緒を付け加えていくわけです。

そのやり方が上手な人がいいアナウンサーだ、それができることがレベルとして上なんだというような考えがまだ残っていたんですね。今でもないとは言えないことなんですけども。

このスポーツ中継放送における情景描写とか即時描写とかというのは、放送の歴史とともに育ってきました。

スポーツの中継放送は、情景描写と即時描写とで成り立っています。情景描写っていうのは、静的な状態、例えば、観客がどうしてるとか、球場やスタジアムがどういう状態であるかとかを伝える方法です。即時描写っていうのは、選手の実際の動きをそのまま言葉に置き換えるという技術です。これは、大正14年、1925年に、ラジオ放送が日本で始まったのと同時に、スポーツ中継の技術としてスタートしました。

はじめは、たぶんもたもたしていたのじゃないかと思いますが、しかしとにかく聞いている人に、音だけでわからせようという必死の努力で、様々な名放送が生まれました。表現もいろいろ開発されました。例えば、野球でバッターが打ったボールが外野に転がると、実況アナウンスは「球は、転々外野の塀」などといいます。もう今では、この表現もすり切れていますけれども、しかしそれを初めて、最初に使った人は、そのフレーズを創造したのだと思います。しかし、「球は、転々外野の塀」という状態は、100回あれば、



本当は 100 通りの別の表現が生まれなければいけないはずですが、本当にそのことを伝えようと思うなら。ところが、そうはせずに、先輩が作ったそのフレーズを拝借して、どういう状況であっても、「球は、転々外野の扉」だけを使って済ませてはいはしないか。

そういう既成の使い古された表現を、事実とは関係なしにただはめ込むだけ、そしてそのはめ込み方がうまければ一流のアナウンサー、超一流にはなれませんね。しかし、そういうようなことが一つの技術論として成立してしまって、大きな反省もなしに数十年やってきてしまったところにひとつの問題があったといえます。

かつてスポーツアナウンサーに、岡田実という人がいました。この方は亡くなりました。この人は天才的な人でした。

志村正順とか、鈴木文弥という人たちもいました。こういう人たちは非常に派手な放送をしていました。ラジオ時代のことですが、虚実取り混ぜて面白かった。外野で、たとえば「センターバックセンターバック、とりました扉際30センチ」なんて、そんなことが分かるわけないんだけど、おもしろかったんです。人気もありました。

だけど、岡田実という人は、冷静で、しかも実に明晰な放送でした。で、彼は1968年、昭和43年の「放送文化」という雑誌にテレビのためのスポーツ実況の方法をこのように書き残しています。

「ラジオの聴取者は、アナウンサーの言葉による表現だけで現場のイメージをつくりあげる。そのためのテクニックの一つとして、かつては美文調、ときには誇張した表現も、それが効果的であるかのように盛んに使われたものだが、このようなスタイルが日常の会話とほど遠いものであることは言うまでもない。ところがテレビとなると、現場のありさまがそのまま映像となって視聴者の目にはいる。媒体の機能という点ではラジオが間接的であるのに対し、テレビは直接的であり、また即物的である。したがって、映像とともに茶の間に入ってくるアナウンスも、映像に密着した形のもの、つまり即物的でなければならない。まして競技の合間には、解説者との対話が入るのだから、全体としては日常会話の形に近づくのは当然のことだ。つまりラジオで通用してきた、美辞麗句を積み重ねた誇張する傾向の表現はもう古い」と言って、ラジオ放送のための方法論を戒めて、彼はこれを実行していました。プロの間では、岡田さんの実況は高く評価されています。

ラジオ時代に育ったアナウンサーはテレビ時代になっても、相変わらず、型にはまった業界用語や使い古しの慣用句から脱却できない人も多かったのです。その点に批判が集まっています、そしてアナウンサー自身もそのことは何となくわかっているのだけれども、どうしようもなく、抜け出すことができずにいた。私自身もそのことでずいぶん悩んでいた、そういうような状態だろうと思います。

たとえば、レストランなどに行くと、ウェイターもウェイトレスもマニュアルを覚えていて、それだけでお客に対応しますね。料理を出すときに、「これはなんとかの炒めものになります」、だいたい「になります」という型にはまった言い方がほとんどです。「これはなんとかを煮たものです」とか、「どういうふうに煮たものです」とか、そういう表現はありません。料理以外の話題をぶつけると、それまでの丁寧な敬語表現がたちまち街の若者ことばに急変したりします。

このあいだ、ある旅行業者の下請けの人と話をしていたら、「お客様のお叱りをいただくこともございます」と言います。「お客様」ということばには、共通に理解されている意味内容があります。ところが、この旅行業者が使う「お客様」というのは、不特定多数の、自分以外、あるいは自分の会社以外のすべてのことなんです。すべてをぼんやりした「お客様」ということばで荒っぽく、くくってしまう。そのことばのあいまいさ、対象とことばとを照合させずに、楽だから、すべてを「お客様」で処理してしまっているんです。

それから、「お叱りをいただく」という表現も不明瞭です。「お叱り」というのは、叱られることしかないとはいえません。「お客さまのお叱り」には、その中に注意もあるでしょう、忠告もある、なにかの提言もあるかもしれない。本当はそういうことをひとつひとつ、提言は提言、注意は注意といわなければいけないけれど、業界用語というのはそこを全部「お叱り」でくくって、茫漠とした広い範囲でやり過ごしていくのです。楽だからですね。無難だからです。

だけどそれが習い性となると、注意も忠告も提言も提案も、ことばとして分けられない。ことばとしての生命が消えてしまえば、やがて認識のうえでも分けられなくなってくる。細かい事実を認識するためのことばが、おおまかな概念を抑えるだけのものになってしまえば、自分らしさも生き生きとし

たことばづかひも生まれてはきません。常套句の便利さと危険は背中あわせです。

でも他人のことは笑えません。われわれアナウンサーの過去の姿がたぶんそうであったと思います。

「球は転々、外野の塀」といってもいろんな転々のしかたがあるのに、すべて「球は転々、外野の塀」としかくくれない。表現として、そのように大まかにしかくくれないだけではない。意識としても、あいまいなくくり方しかできなくなっている。やがては物事を論理的、分析的に認識できなくなる。常套句的な表現のこわさは、ここにあると思います。

そして、それが読む場合だけではなくて、自由な会話、自由な発想をすべき中継やインタビューや司会の場でも、硬直化したパターンから抜け出られないでいたのです。だって、そのように訓練されているんですから。あるアナウンサーが、どなたかとお天気の話をしていて、相手に「今日はいい天気ですね」と言われて「ああ、そうですか」と言ったというんです。天気ぐらひは自分で判断できるだろうと……。これは笑い話ですよ。

そういうような、袋小路に入り込んだ状態を示唆する話もあります。

山根基世というアナウンサーがいます。毎週土曜日、朝6時半から、絵や工芸などの美術家にインタビューする番組を担当しています。いいインタビュアーです。彼女に私が聞いた話です。彼女は平成元年から二年間、「日本・出会い旅」というテレビ番組を担当していました。これは、各地へ出かけていってインタビューをして、自分がリポーターとなって報告をするという形式です。彼女はこう言っていました。「『日本・出会い旅』のような旅番組の良さは、普通の人の普通の暮らしこそが面白いということを見ることができることです。こちらに視聴者の受けをねらうような変な目的意識があっては駄目なんで、一人の旅人として楽しめるかどうかということです。苦労したのは、それまでのアナウンサーの枠から抜け出すということでした。そうしないと本当のインタビューにならない。でも不安もありました。読みや司会やインタビューといったアナウンサーの大切な技術が落ちていくのではないか、これではアナウンサーとしては駄目になってしまうのではないか、矛盾しているようですが、今になればそれが正しい方法だったと分かるんですが、この時これはいい経験でした」

たしかにその方法論が間違っていて、型にはまった表現だけを使っている

と、次第に、表現だけではなくて、思考そのものが硬直化して闊達な思考ができなくなります。あるいは物を本当に見ることもできなくなってしまいます。物を見ても、それを正しくことばに置き換える作業もできなくなってしまいます。

時代はラジオからテレビに大転換しました。ラジオ時代はまだよかったかもしれませんが、ところが、テレビになると姿も顔も出てきます。そういう時に、相変わらず古いやり方だと、ますますボロが出てしまいます。つまり、ラジオからテレビへという技術革新の波の中で過去の方法論は破綻しつつありました。

ラジオ時代のアナウンス技術はどのようなものかという、「話しかけ調」という調をつくることでした。内容をわかりやすく、親しみやすさを感じてもらうために話しかけるような調子で伝えようというのが目的でした。

内容を正しく伝えることが最大の目的だったんですが、話しかけ調のその“調”の方、イントネーションや声の出し方の工夫でなんとか親しげな調子をつくることに関心がうつっていきました。そして、いつしかその“調”の方だけが、一人歩きしだしました。

ニュースでは、親しみと同時に、格調あるNHKニュースらしさの雰囲気を出すことも求められました。内面からにじみでる人間としての親しみではなく、技術として、話しかけ調という“調”をマスターし、それが非常にレベルの高い、親しげな優しい言い方になることを、一種の目的論的に取り違えていってました。それはそれなりに、美文調であったり、聞いていて感じが良かった、ということはあると思います。

で、具体的にはそれはどういうことになっていったかということ、形容詞や連体修飾句をやたら強調するアナウンスになっていました。

例えば、「美しい花」というとき、「花が美しい」という文全体の意味とは関係なく、形容詞の「美しい」だけを無意味に強調したり、あるいは連体修飾句の箇所を強調したりするのです。強調するというのは、声を高くすることもあるし、大きい声を出すこともあるし、場合によっては、ゆっくりしゃべることもあるし、そこだけちょっとすました声を出すというやり方もあります。いろんなやり方でとにかく強調するんです。

日本語の音声言語というのは強調すると、そこに意味が付加されます。そこに実はフォーカスが当たってしまう。そうすると、その意味が際立ちま

す。形容詞や連体修飾句が出る度に、前後の文脈に関係なく、のべつまくなしに強調を与えると、文全体としては何がなんだか意味が分からなくなっちゃう。

分からなくなるといっても日本人ですから、全然意味がとれないということはありません。わかりにくくなるんです。アナウンサーの場合は、それに加えて、内容ではなく雰囲気やムードを出そうとするので、内容を知りたい聞き手にとっては、内容よりうわべの情緒の方が強く伝わるという結果になってしまう。押しつけがましい放送になってしまうんです。わかりにくくなくても押しつけがましくなっても、その“調”、話しかけ調、親しげな感じを出そうということに傾斜していったのが、ラジオ時代でした。論理的であるよりは情緒的な感じのよさを高く評価する風潮はおとろえませんでした。その傾向が、インタビューや司会などの自由な表現こそが生きるトークにまでも及んでしまって、どうにもならなくなっていたというふうに考えられます。

これが40年代から50年代にかけてのアナウンサーへの批判の根幹であり、私たちアナウンサー自身の反省でもあったのですが、まだこのときにはそこまで分析できてはいませんでした。ただ、これは何とかしなければいけないと思い、あせっているという状況でした。

ではアナウンサーのなかに、その弱点をどのように克服しようという動きがあったのか、それを二、三ご紹介します。

昭和45年、1970年のことです。アナウンサーは大学を出てNHKに入ると、1ヶ月間、私たちのころは3ヶ月でしたが、アナウンサーとしての最初の研修期間があります。もちろん、NHKの職員としての一般的な知識の研修を受けるわけですが、そのなかでもアナウンサーは専門研修として、アナウンスの技術的な研修を受けます。

中央研修所というのが、世田谷の砧にあります。研修所には専属の指導役がいます。先生とっていましたが、その先生はアナウンサーのOBです。で、その人たちが中心になって研修プログラムを作り、そこに現役のアナウンサーが2人先生として加わって、一緒に研修をすすめるわけです。

昭和45年、現役のアナウンサーとして研修に参加したのは、私の友だちでもあった西沢祥平と杉沢陽太郎です。

西沢は研修所で、とにかく原稿を読むのではなくて、内容を伝えるんだ、

話すんだ、というようなことばかり言ったというんですね。ところがその研修所のスタッフは、普通の発音とイントネーションで読むんだ、とラジオ時代の方法論で指導しようとするんです。研修所と現場の考え方の間の軋轢が生じます。

当時33人の新人アナウンサーがいたんですが、そのなかの1人に木村君という男がいて、のちにこう言ってました。「どういう意味なのか西沢さんの言うことが、まだ研修中にはよくわからなかった。アナウンスの基本は発音やアクセントだ、という研修所側の教育に対して、いやそうではない、まず形式より内容を伝えることだという考えの実習がやられる。西沢さんの言うほうが正しいように思えても、当時はそのはざ間でずいぶん悩んだ」。むしろはっきり言えば、困ったなあと思ったんだそうですね。こういうような、アナウンサーのなかの試みも昭和45年当時にはスタートはしていました。

私は大阪から東京のアナウンス室に転勤してきたのが、昭和44年でした。その翌年の昭和45年の4月から「スタジオ102」という、まあ今でいうニュースワイドショーのはしりの番組がスタートしました。そしてその番組にテレビではじめての専属リポーターを登場させることになりました。私はそのリポーターの一員になりました。自分で取材をしてスタジオでレポートしたり、あるいは現場から中継をしたりするという仕事が始まったわけです。

自分でもレポートしながら、毎朝全国各地の放送局から出てくるアナウンサーの中継やレポートを聞いてですね、電話でその担当アナウンサーと話をするようにしていました。これを平田通信とってました。電話の相手には先輩もたくさんいるんだけど、とにかく先輩後輩の区別なく、4月から12月まで、ほとんど毎朝電話をかけていました。

話しの中味は、主に、なぜその時あなたはそう言ったのかということでした。どうして「そうですか」と言ったのですか、どうして「そうですね」とあの時言ったんですか、というようなことから始めるんです。そして、なぜそのことばを選んだのかということポイントにしていました。

私の心積りでは、そういう会話をしつつ、アナウンサー全体の意識の改革をすすめようと思っていました。使い古しの慣用句や常套句的表現の組み合わせ、情緒的なしゃべり方をアナウンサーの積年の病弊とよんでいたのですが、その病弊から自分自身も抜け出すために、多少生意気でオーバーなパフォーマンスも必要だと思っていましたから。

その後私は、アナウンスの方法論上の問題を検討しなければならない責任者になったものですから、年に4、5回、全国のアナウンサーの2、30人が東京に集まって研究会を開くんですが、その会で、アナウンスの再検討や意識の改革を討議をするようにしていました。

昭和48年当時、私が全国のアナウンサーに向けて出した文書のなかにこんな一節があります。

「アナウンサーの中継やリポートについて情景を伝えるには、往往にして「秋ラシイ風景デス」「暗イ雰囲気ニ包マレテイマス」のように、自分が抽象化した結果をしゃべってしまうことが多い。しかし私は、自分が抽象化した結果を伝えるよりは、その前段階のディテールを細かく述べる事のほうが、より正確だと考えている。例えば、開票結果が思わしくなく意気が上がらぬ党本部の雰囲気は、一言で「暗イ雰囲気デス」と片づけるのではなく、リポーターが暗いと判断しえた根拠を探し出して、その具体的事実を伝えて視聴者に判断してもらう、という方法である。ディテールを細かく伝えてくれれば、視聴者の心に「秋ラシイ」と一言で集約する以上の豊かな深いイマジネーションをかき立てる余地が生まれる」

当時私は「形容詞、形容句を事実で語れ」と言いつづけておりました。

形容詞で「美しい桜」というふうに抽象化する前に、何故それを美しいと感じるか、そのディテールを伝えろというようなことを全国のアナウンサーによびかけておりました。

そういう最中に、実はさきほど話した「連合赤軍浅間山荘事件」が起きました。

浅間山荘事件は、昭47年の2月のことです。事件の発生は、2月19日でしたが、2月19日の夕方、軽井沢まで車で行って、それから10日間、真冬の軽井沢から毎朝、7、8分間の中継を出しておりました。

最後の長時間中継は2月28日の月曜日でした。朝9時40分から放送を始めて延々10時間40分、しゃべりつづけていました。連続ナマ中継としては、たぶん世界記録だと思います。

当日は、報道関係各社はその日一日だけで52社、1300人の報道陣が集まりました。その時NHKでは、私をふくめて6人のアナウンサーが中継に参加しました。テレビが3人、ラジオも3人でした。私がテレビのメインのキャスターの役割でした。

中継の前日、警察からの情報で明日が「牟田泰子さん救出作戦」だということが分かったので、夜アナウンサー全員を集めました。そして「とにかくセンセーショナルな放送だけはするな」、「推測でものを言うことはやめよう」、「確認できた事実だけを伝えよう」、「しゃべることがなくなったら、それまで伝えた事実を繰り返そう」、このような事を確認して、翌日の放送に入りました。

民放各社がどのような放送をしたのか、知りませんでした。20年ぐらい経って何回か「連合赤軍浅間山荘事件」の回顧番組が放送されました。その時初めて、民放各社の中継を録画で見ることができました。NHKを含めて5社が中継しました。それを見るとやはり、民法の放送は推測、憶測が多い。安易に流れてしまうんですね。

「連合赤軍浅間山荘事件」の中継は、NHKアナウンサーが批判にさらされているなかで、アナウンサー自身が批判を克服しようと努力をしている、その最中の出来事でした。私自身も、自分の方法論を試さなければならない、あるいは試される、というような放送でした。その意味で、個人的にも浅間山荘事件はとても思い出が深い中継番組です。

ほかにも、そうしたアナウンサーの努力の一つであったと思いますが、森本毅郎アナウンサーの試みがあります。彼はのちにTBSに移りました。

森本毅郎は、「NHKニュースワイド」という新番組が始まった昭和55年の4月、キャスターになりました。それまでの「スタジオ102」を大型にした、朝のワイドニュースです。非常に若いキャスターでした。

初日からものすごいスピードでニュースを伝えはじめました。大変な批判的になりました。

で、どうしてそういうふうにしたか、森本はこう言っています。

「アナウンサーはどうも情緒的だ、と言われていた。アナウンサーのニュースは丁寧だが慇懃な感じがして自分でも嫌いだった。ゆっくりだと、抑揚過多になったり、形容詞に思い入れが入ったりして、軟弱な印象になる。もっと無機質になろう。情緒性を排す」、これは私が言っていたことなんですけど、「情緒性を排すをキーワードに、スピードに乗せることで情緒性をカットし、論理性を取り戻そうと考えた。それに情報量が増えたと、ニュースの項目も多くなったこともテンポアップの原因になった」

森本の速いニュースは、はじめの半年ぐらいは反対意見が多かったんです



が、その批判はおさまっていきました。彼の速さとともに情緒性を排した論理的な伝え方が受け入れられたんです。

森本の言っていることを補います。

NHKニュースは非常に文が長いです。したがって、それを一息で読むのはとても苦しいんです。

日本語の話しことばの文というのは、句点の丸までが一文だとすると、その音調は文の頭から「への字型」になって、限りなく下降して行くわけです。そして終わる。ところが、文が長ければ長いほど、音の高さは下降してって、もう生理的には不可能な音域になっちゃうわけです。しかし、それが日本語話しことばの自然な音調なんです。

長い書きことばの文を音声化しているわけですから、その技術は高度で非常に難しい。だからスピードを速めて一つの意味のかたまりを、一息で「への字型」で読んでしまおうとするのも、一つの方法ではあるわけです。

ニュースの読みの速さというのは、戦後すぐの昭和20年代には、漢字仮名まじり文で一分間に260から280字ぐらいでした。ところが、昭和39年、1964年当時の今福祝アナウンサーのニュースは一分間320字ぐらい、だいたい300字をちょっと越えるぐらいの量でした。しかし、森本は420字。速いと言われている松平アナウンサーでも400字ぐらいです。現在、夜7時のNHKニュースを担当している森田美由紀アナウンサーの陰でニュースを読んでいる男性のアナウンサーがいます。蔭山と言います。陰で読んでいるから、（笑い）それは全然関係ありませんが。12月3日に録音をとって調べましたら、蔭山アナウンサーは、400字ぐらいですね。拍数にして、480拍ぐらいです。だいたい1分間に400字ぐらいの速さでニュースを読んでいるようです。

そのようなスピードは、世の中のスピードが上がっているということも一つの原因だろうと思います。しかし、スピードが落ちると、ともすると抑揚過多になったりして情緒的になって、意味と関係なく強調が入ったりして、日本語の音声表現として不自然になりやすいというのでスピードを速めたという森本の考えたニュースの提示の方法が、世の中が早口になっている状況にぴったり合ったんだらうと思います。

とにかくアナウンサーは試行錯誤をつづけていました。私たちが何か暗闇の中でもがいているような状態の時に、こういう新聞記事ができました。

これは私にとって非常な啓示を与えるものでした。それは何かというので

すね、学習院大学教授で、ブレヒトの研究者でもあり演出家でもある岩淵達治氏の文です。

岩淵氏が書いたのは、東京新聞の夕刊の「イントネーション研究のすすめ」という題の文です。昭和50年の4月10日付です。そのなかで、アナウンサーのイントネーション、抑揚が時々おかしい、そのために文章が正しく伝わらなくなってしまうんだということを指摘したわけです。

岩淵さんによると、「アナウンサーのニュースは発音はまぎれもなく美しい標準語だが、自然のイントネーションが壊されているのではないかと気になる場合があるのだ。それは特にイキの長いセンテンスを読むときに起こりやすい」。通常の文のイントネーションはひたすら下降していくのが自然なのだが、長いセンテンスで、「意識しないで読み始めると、抑揚がつけられなくなるまで音程が落ちてしまうので、自然の流れに逆らって」、意味とは関係のない部分に強調をいれてしまう。強調を入れて高くする。低くなって、声が出なくなるから、意味とは関係なくそこで音の高さを上げてしまう。その結果不自然なイントネーションとなる。

「はなはだしい場合は、何か所にも強調をおいた語り口にぶつかることもある。強調さえすれば意味の伝達が行われると言わんばかりだが、それは逆である。一つのセンテンスにいくつもの強調をおくとかえって相殺されて文旨は伝わりにくくなる」。当たり前なことなんですけど。

一文、場合によっては一つの句は、ふつう一つの意味のかたまりを形成していて、そこには一つの情報が乗っています。長い文には複数の情報がふくまれていることもありますが、その情報にこそ、フォーカスが当てられるべきで、やたらめったらフォーカスを当てていると、全体としては何が何だかわからなくなります。

これは当たり前なんですね。今はよくわかります。

岩淵氏は、例文としてこういう文を出しました。ニュースの終わりによく見られる文として「緊急の措置を取る必要があるとみられています」という文です。NHKのアナウンサーはこれを無原則に意味に関係なく強調するというのです。たしかにこれは、どこにでも強調をおけるような文です。「緊急の措置を取る」とも言えますし、「緊急の措置を取る」とも言える。「緊急の措置を取る必要がある」とも言える。あるいは「緊急の措置を取る必要がある」とも言える。あるいは「緊急の措置を取る必要があるとみられてい

ます」とも言えます。こういうような、文の意味とかけ離れたイントネーションがよくないと具体的に指摘したんです。

そこではじめて、イントネーションというのは文の意味と深く関わりがある、われわれがつまづいていたのはこれなんだ、つまり抑揚にこそ最大の問題があったんだな、と気づかされたんです。

私と杉沢陽太郎アナウンサーの二人でその問題について対談をして、それを全国のアナウンサーに配りました。しかしアナウンサーの仲間からは批判されました。杉沢・平田のイントネーション論でアナウンサーの抱える問題は解決されない。如何に話すかではなくて、何を話すかではないか。内容こそ大事なんじゃないか。なぜ今、技術論なのだというんです。

当時は大変苦労しました。しかし、今はすべてのアナウンサーが話すというということを基本にすえて、アナウンスを考えていると思います。昔のように美辞麗句や、あるいは猫なで声の抑揚や、意味のないイントネーションできれいに着飾った形だけの、そういうアナウンスをするアナウンサーはさすがに少なくなってきたと思います。

その後もいろいろ模索は続きました。ちょうど、私がNHKを辞める直前のことですが、佐々木敦アナウンサーが、作家の井上ひさし氏を訪ねて、井上氏は一体アナウンサーの日本語をどう考えているのか、いろいろインタビューをしました。

その記録をまた全国のアナウンサーに配布したりしましたが、その井上ひさし氏の談話にこういう一節がありました。

「アナウンサーが悩んでいるのは話しことばと書きことばとの間のところだと思うんです。そこには何の規制もない、こっちに近づくか。むこうに近づくかというような」

規制というのはある意味ではモデルというか規範というか、そういうようなものだと思います。

「そうして見てくれば、日本語の話しことばというのは、50年ぐらいかかって、いま言うところの話しことばと書きことばの中間にある“述べる言葉”、“談話調”というものをNHKのアナウンサーが開発していくかどうかという事にかかってくると思います」

井上氏は、この問題は、これから50年ぐらいかかるんじゃないか、というのです。つまり日本語の音声による（われわれアナウンサーはパブリックス

ピーキングとってききましたが) 公的な場での話し方や日本語を、将来どのように整えていったらいいのか。プライベートな話というのは一向に不自由を感じたことがないんですが、公的な場での話というのはなかなかうまくいかないのを実感しています。NHKのアナウンサーの公的な場での話し方は職業とも結びついていて実践的です。効率がよく、わかりやすく、使いやすい、さらに品格のある公的な場での日本語を磨こうとするなら、50年ぐらいの時間をかけて少しずつ考えていかなきゃどうしようもないんじゃないか、この事はしかし非常に大事なんだ、NHKのアナウンサーが、その開発の責任をもてということ井上ひさし氏は言っているんです。

さて、これまで話してきたNHKアナウンサーの悩みや問題意識は、所詮、狭い狭い業界のなかの問題かもしれません。しかし、それは日本文化の根幹にかかわる大事な問題だと思います。たまたま私はNHKをやめてお茶大に来て、留学生を教えたり、あるいは皆さんと一緒に日本語の問題を考えたりするチャンスに恵まれました。

その経験にてらして考えてみると、日本語の教師は学習者に、どういう日本語を教えるのかと悩むことと共通しています。

本国で教えてもらった日本語が、日本の通常の生活のなかでは役にたたなかったという話を時々耳にします。だからといって、チョベリバとかチョベリグなんていうことばを教えてもしょうがないということは、だれにもわかります。でも本当に、日常、私的に交わされている日本語を教育しなければいけないのかどうか。どんな日本語を教えたらいいのか。私たち自身が、もっと効率のいい品格のある的確に自分の考えていることが表現できる、そういう日本語を一人一人がイメージして、そのような日本語を学習者にも教えていこうというふうに考えてもいいのではないか。

日本文化の根幹にふれる問題意識をもちつづけている日本語教師がいて、50年先の日本語を見すえた日本語教育というもの、あってもいいのではないかと思いつつ、ただいたずらに10年を過ごしてしまいました。まとまらない話しでしたが、これで終わります。

ありがとうございました。